

中屋先生の教えを守って

第15期 岩崎 芳史 (1967年卒業)

私は小さい頃から大病を繰り返し、中学校から大学時代まで体育の授業はすべて見学であったため、将来の夢を抱くことはなく、ただ無理はせず、穏やかに過ごすという習性が出来上がっていた。

コツコツと努力を重ねることは厭わず、都立西高を昭和37年に卒業し、一浪してやっと文Ⅲに入学できた。

勉強からやっと解放されて大学生活を楽しもうとESSにはいったが、皆の英語のうまさに追いつけずに半年で退部してしまった。

充実感はなかったが、それでも楽しい一年半が過ぎようとしていた。

幸い教養学科に進学可能な成績をとることができた。国際関係論はいかにも堅そうだし、ヨーロッパや中国・ロシアより、世界を牽引するアメリカが良いと思志望した。

2年生の秋にアメリカ科に集まったのは文系・理系各学部からの9名であった。中屋健一先生の最初の授業で分厚い2冊の原書を渡され、原稿用紙10枚にまとめて提出せよとのお達しで、それから半年間は週2回の徹夜でレポートを書く日が続いた。

最初は本の厚さやまとめ方に戸惑ったが、そのうちに要領を覚え、この充実した生活にはまり込み快感を覚えるほどになっていった。

中屋先生はうわさ以上に最初は厳しく学生は雑巾と同じで絞れば絞るほど良いと言っていたが、途中からはレポートはポイントだけを書いて短ければ短いほど良い、長く書く奴はバカだと言いはじめられました。年齢55歳きつと学問に立ち向かう体力のピークを越えていたのであろう。

究極まで追い詰められた授業の後は仲間と食事をとって徹夜の憂さを晴らすのが常であった。皆本音で自分をさらけ出したので、お互いの距離感が近く何でも分かりあう、信頼感の厚い関係が半年で築きあげられた。

先生はことのほか我々15期生を気に入って下さり「クラブ・バッファローズ」と命名して下さいました。

ちなみにこの仲の良さは今日まで続き、私が幹事で毎年晩秋に妻同伴で食事会を開催している。先生がご存命中は伏木千鶴子さん共々毎年出席して下さいました。



クラブ・バッファローズのメンバーと

愛称で呼ばれた、ソニーの創業者盛田昭夫氏の長男、英夫君なども一緒であった。

学生時代は山岳部で活躍された先生は、休みごとに我々を旅に連れて出た。春は安達太良、夏は伊豆、冬は白馬でスキーなどであった。

とりわけ恒例の中屋スキー教室には先生の学友や知人の子息が多数参加、たとえば「ソニー坊や」の

4年生の初夏に中屋先生の部屋の下を歩いていたら、2階から先生が「おい岩崎、お前の就職先は住友銀行に決まったぞ」と声が掛かった。「はい、わかりました」と返事をした。小松健男さんをはじめ諸先輩方が就職しているので、ごく自然の流れに乗った感があった。

昭和42年に入行して丸の内支店に配属された。直後の五月祭は中屋先生が教えにいらしていた津田塾大アメリカ科との合同コンパであった。ここで妻になる敦子に巡り会った。家も近く勤め先が共に有楽町であったため、とんとん拍子に話が進み、入行2年目の冬に結婚することになった。仲人は当然ながら中屋先生にお願いした。

同期のN君が「バッファローズ新聞」なるネタ紙を発行して、二人のあること、ないことを楽しく記載してくれた。先生も二人の事をけなし口調で紹介され出席者を笑わせたが、教え子同志の結婚をことのほか喜んで下さり、ニコニコしておられた。



中屋先生の媒酌で挙式

入社して3年たった昭和45年に住友銀行を退社して、三井不動産に転職することにした。心の自由を最重視する私の性格に合わなかったためである。中屋先生に報告に伺ったが、一言もお小言

はなく「わかった。人はそれぞれ自分の思う道を進めばよい。僕も共同通信を辞めて東大に来た」と言われ、ほっと胸をなでおろしたことを今でも思い出す。それどころか三井不動産入社後に転居した埼玉県上尾市の我が家に15期の仲間を呼んだ時には先生もわざわざお見え下さった。その際私がかつ井が好物だと言ったら後日渋谷の美味しいかつ井屋に招待して下さいました。

入社後は浚渫・埋め立て部門で海外担当になり、昭和40年代後半はインドネシア、マレーシアなどの東南アジア、オイルショック後の昭和50年代はじめはアラブ首長国連邦(UAE)、エジプト等の中東を担当し、昭和53年にはエジプトのスエズ運河新航路浚渫工事を受注して現地に駐在した。大学時代に学んだアメリカとは違い、東南アジア、中東は人種・宗教・生活スタイルがまったく異なったが、アメリカとの対比でそれぞれの国の特徴が一層際立って理解できた。

中屋先生は同盟通信(現・共同通信)社に入社され渉外部長をされるなど民間での経験が長かったため、単なる学者ではなく、世の中や時代の流れを現場密着型で鋭く敏感にとらえて、自分の感じたままを飾ることなく率直に吐露するご性格であった。

私の人生を振り返ってみると、今までまさに中屋先生の教え通りの生き方を実行してきたような気がする。すなわち物事の本質を捉える事、人を大事にすること、自分の世界にはまり込まずに常に世界の動きに敏感であること等である。本社にいることはほとんどなく、常に現場に飛び込んで、問題点を洗い出し、その本質を徹底して追求し解決を目指して実践してきた。その間に人脈もどんどん広がった。

現在も日本郵政の不動産担当として励んでいる。

中屋先生は昭和62年に77歳でご逝去されたが、奇しくも亡くなられた3月28日は私の誕生日と同じ日であった。昭和58年に勲三等旭日中授賞を受賞された。お祝いの席では今まで見たこともないほどの満面の笑みを浮かべて喜んでおられたそのお姿が今でも忘れられない。